

繁殖のお話し(その16 哺育管理のお話 2)

(有)シェパード 獣医師 松本大策

暑い日が続きますが、みなさんお体はいたわっていますか？配合飼料の価格が高騰しています。その原因として、今のところ輸送コストや収穫コストに関わる原油価格の高騰の影響が大きいといわれています。しかし、これから数年はバイオエタノールの原料として競合してしまうため、世界的な穀物価格の高騰が懸念されます。

繁殖経営では幸いさほどの穀物を使う必要がありませんから、夏場のコーンサイレージの仕込みなどで配合飼料を使わない経営を模索しましょう。原料費を抑えられたら、むやみに規模拡大しなくても経営の足腰が強くなりますよ。

さて、先月はおもに自然哺育の際の母乳の品質改善のお話をしましたが、今月は人工哺育の際の注意点や実際の給与量などのお話しに移りましょう。

僕が全国を巡回して見ると、けっこうミルクの量が不足している農場をよく見かけます。とくに冬場は体温維持のためにカロリーが20%以上多めに必要になりますから気を付けなければなりません。ミルクの量が足りないと、当然の事ながら子牛の発育は悪くなりますし、抵抗力が落ちるので肺炎などの病気を起こしやすくなります。そうするとさらに発育が悪くなってしまいますし、経済価値のない子牛になってしまう場合も少なくありません。

6リットル哺乳の一例

4リットル飲み始めてからの日数	1	2	3	4	5	～	18	～	24	25	離乳
朝	2	2	3	3	3	～	3	～	3	2	→ 0
夕	2	3	3	3	3	～	3	～	3	2	→ 0

日量4リットルに達するか生後10日後より乳量増加開始

6L飲みはじめてから2週間程度6リットル哺乳し、その後急速に(1日で)4Lに落とす

僕は8倍希釈のミルクの場合で最高哺乳量 5.5～6リットル程度に設定することが多いです。もちろんミルクのメーカーによって適正な給与量は違いますし、あるメーカーの6リットル哺乳よりも、別のメーカーの4リットル

哺乳の方が発育がよかった、などということもあります。適正なミルクの給与量は、みなさんのうちにいる子牛と相談するのが一番です。

ミルクが多すぎる場合は飲み残しや軟便・下痢が現れてきますし、ミルクが少ないと、いつまでもからの哺乳瓶で遊んだり、哺乳ロボットの前から離れようとしません。また、



子牛の活性も低下します。

子牛の発育が悪く、肺炎などの病気が増えていて、白癬にかかった子牛が多いようなら、ミルクの量が不足していることを疑ってよいでしょう。

子牛にミルク(代用乳)を与えるに当たっては、量だけでなく温度や溶かし方にも注意してあげましょう。温度が高いと子牛は警戒して飲みたがりませんし、温度が低い場合、消化・吸収が悪くなって下痢の誘引となる場合があります。また、意外な盲点なのが溶かし方やミルクの品質不良で出来る「ダマ」です。ダマというのは、いわゆる溶け残りというか、粉末が水の膜で覆われて塊になった状態ですが、これを子牛が哺乳する際に、喉のあたりでダマがはじけて中の粉末がファツと広がる場合があります。これを子牛がまちがって気管に吸い込むと、元々ミルクの高栄養の粉末ですから気管の中でバイ菌の格好の餌になります。これが原因で「吸飲性肺炎」というものを起こす場合があります。



ミルクのことばかりお話しましたが、環境面では温度管理と通気という背反する2つの要素を両立してあげる必要があります。冬場は保温、夏場は暑熱対策です。冬場でしたら、保温と通気を確保する一番のコツは、乾燥した敷き料をどっさり入れてやる事です。子牛はお腹が冷えなければ、かなり換気しても寒さに耐えられます。逆に夏場は、暑さで飲水量も増えますからオシッコの量も増えて床がぬかるみがちになり、かえってお腹を冷やすことがあります。夏場は通風をしっかりと確保したり、屋根の断熱をしっかりと暑熱対策をすること、敷き料は乾燥を保つこと、が重要です。

